

Citation: Fedorowicz Z, Aljufairi H, Nasser M, Outhouse TL, Pedrazzi V. Mouthrinses for the treatment of halitosis. *Cochrane Database of Systematic Reviews* 2008, Issue 4. Art. No.: CD006701. DOI: 10.1002/14651858.CD006701.pub2.

CRG名: Oral Health

[最新版\(英語版\)はこちら](#)

英語版最終改訂年月: 10 August 2008.

Clib issue No.; N/U: 2008 issue 4; Update

背景: 口臭とは、口腔から生ずる不快臭である。洗口剤はふつう、口臭に対処することを目的として使用されるが、一般に臭気を中和させるものと、マスクングするものとに分類することができる。

目的: 口臭のコントロールにおける洗口剤の効果を調査すること。

検索戦略: Cochrane Oral Health Group Trials Register(2008年8月まで)、Cochrane Central Register of Controlled Trials(The Cochrane Library 2008年Issue 3まで)、MEDLINE(1950年から2008年8月まで)、EMBASE(1980年から2008年8月まで)、CINAHL(1982年から2008年8月まで)から検索した。これらに言語の制限は設けなかった。

選択基準: 口臭を呈し、特別な歯科疾患のない健康な18歳以上の成人に対する、洗口剤群とプラセボ群のランダム化比較試験(RCT)。考慮された主要なアウトカムは、口臭について自己表現されたものと官能(ヒトの鼻)の評価であり、副次アウトカムは、ハリメーターやポータブル・サルファイド・モニター、もしくは炎光光度検出器付きガス・クロマトグラフィーを用いて測定した口臭の評価を含めた。

データ収集と分析: 二人の独立したレビューアがデータを選別、抽出し、レビューに含められた試験におけるバイアスのリスクを個別に評価した。

主な結果: 洗口剤群もしくはプラセボ群に無作為抽出された293人の実験対象者が関わる5つの試験が、このレビューに選定された。試験間の臨床的異種性を考慮すると、結果をプールすることや、抽出されたデータのメタアナリシスは不適當であるため、レビューに含められた試験結果についての記述要約のみが提供された。0.05%クロルヘキシジンと0.05%塩化セチルピリジニウムと0.14%乳酸亜鉛配合の洗口剤は、プラセボと比較して、有意にベースラインから官能スコアの変化の平均値(±標準偏差(SD))を減少させた(-1.13±1.1対-0.2±0.7、P<0.005)。さらに、揮発性硫化物(VSC)のピーク・レベルにおける変化の平均値(±SD)に、より有意な減少を引き起こした(洗口剤群-120±92ppb対プラセボ群8±145ppb)。クロルヘキシジン塩化セチルピリジニウム乳酸亜鉛洗口剤は、プラセボと比較して有意に舌(P<0.001)と歯(P<0.002)を着色することが示された。しかしながら、3つの試験の結果が不完全な報告であることと、さらに2つの試験では、アウトカムとして、VSCレベルの評価にハリメーターしか使用されていないことから考えて、これらの結果を解釈する際は注意しなければならない。

レビューアの結論: クロルヘキシジンや塩化セチルピリジニウムのような抗菌性物質を含む洗口剤は、口臭を産生する舌上の細菌量を減少させる役割がある可能性があり、二酸化塩素と亜鉛含有の洗口剤は、有臭性硫化物を中和するのに効果的であろう。

適切にデザインされた大標本のランダム化比較試験や、より長期的な介入、そしてフォローアップ期間がさらに必要である。

(翻訳 加治佐枝里子・監訳 佐々木好幸; JCOHR)

翻訳公開日: 09年2月20日

点がございましたら、Minds事務局までご連絡ください。なお、オンラインライブラリは年4回改定版が発行されます。Mindでは最新版の日本語訳を掲載するよう努めておりますが、編集作業に伴うタイム・ラグが生じている場合もあります。ご利用に際しては、最新版（英語版）の内容をご確認ください。